

加古川市

天神前遺跡・山中遺跡

—一般県道平荘大久保線道路改良事業に伴う発掘調査報告書—

2003年1月

兵庫県教育委員会

加古川市

天神前遺跡・山中遺跡

-一般県道平荘大久保線道路改良事業に伴う発掘調査報告書-



天神前遺跡遠景



天神前遺跡全景



山中遺跡全景



山中遺跡全景

例　言

1. 本書は、兵庫県加古川市神野町石守字天神前に所在する天神前遺跡、同神野町石守字山中に所在する山中遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査ならびに整理作業は、兵庫県加古川土木事務所の依頼を受けて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。
3. 発掘調査は、平成5年度から平成6年度の2カ年にわたって実施した。それぞれの実施年度および遺跡調査番号は下記の通りである。

詳細分布調査	平成4年度	遺跡調査番号	(920390)
確認調査	平成6年度	遺跡調査番号	(940259)
全面調査	平成5年度	遺跡調査番号	(930169) (天神前遺跡)
	平成6年度	遺跡調査番号	(940068) (山中遺跡)
4. 整理作業は、平成14年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に於いて実施した。
5. 本書で使用した方位は、旧国土地標V系を基準にし、水準は東京湾平均海水準（T・P）を使用した。また、方位は座標北を指す。
6. 本書の挿図、第1図、第6図は国土地理院発行の5万分の1「高砂」を、第7図は2万5千分の1「加古川」、「三木」の図幅を使用した。また、図版1は加古川市発行の2千5百分の1「大野」「北野」「山手」、「福留」をもとに作製した。写真図版1は国土地理院が昭和50年に撮影の空中写真CKK-74-11 C7-62を使用した。
7. 遺物実測図については、断面を黒く塗りつぶしたものは須恵器・陶器、断面が白ヌキのものは土師器、断面がトーンのものは磁器をそれぞれ示している。
8. 土層などの色調は、小山田正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帖』1992年版を使用した。
9. 本報告にかかる出土遺物・写真などの関係資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所および、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所魚住分館にて保管している。
10. 本書の編集は、柏原美音の補助を得て岡本が実施した。執筆分担は目次に示した通りである。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	(岡本)	1
第1節 調査に至る経緯		1
第2節 確認調査の経過		1
第3節 全面調査の経過		1
第4節 整理作業の経過		2
天神前遺跡調査日誌		2
山中遺跡調査日誌		3
第2章 遺跡をとりまく環境	(岡本)	7
第1節 地理的環境		7
第2節 歴史的環境		8
第3章 天神前遺跡の調査	(岡本)	13
第1節 遺跡の概要		13
第2節 遺構		13
第3節 遺物		14
全体の概要		14
須恵器		14
土師器		14
備前焼		14
青磁		14
第4章 山中遺跡の調査	(中村)	15
第1節 遺跡の概要		15
第2節 遺構		15
第3節 遺物		16
第5章 まとめ	(岡本)	17
第1節 天神前遺跡について		17
第2節 山中遺跡について		17

挿図目次

第1図 遺跡の位置 (日本全国・全県・市域・周辺)	iii
第2図 平成5・6年度分布調査範囲図	4
第3図 平成4年度詳細分布調査トレンチ位置図	5
第4図 平成6年度確認調査トレンチ位置図	6
第5図 加古川周辺の地形図	7
第6図 周辺の遺跡	11
第7図 加古川市域の条里	12
第8図 山中遺跡出土石器	16

本文写真目次

写真1 調査風景	3
写真2 調査風景	3

表目次

第1表 周辺の遺跡	11
第2表 天神前遺跡出土遺物観察表	18

図版目次

図版1 天神前遺跡・山中遺跡周辺図	溝土層断面図
図版2 天神前遺跡調査区位置図	出土遺物
図版3 天神前遺跡全体図	山中遺跡調査区平・断面図
図版4 調査区壁土層断面図	山中遺跡調査区・溝土層断面図

写真図版目次

卷頭図版1 天神前遺跡遠景	写真図版6 S D 0 1・0 2 完掘状況 (西から)
天神前遺跡全景	S D 0 3 完掘状況 (北から)
卷頭図版2 山中遺跡全景	出土遺物 (1)
山中遺跡全景	出土遺物 (2)
写真図版1 天神前遺跡・山中遺跡空中写真	A地区全景 (南から)
写真図版2 天神前遺跡全景 (北西から)	A地区全景 (北から)
天神前遺跡全景 (西から)	C地区全景 (南から)
写真図版3 S D 0 1 畦A断面 (西から)	A地区 S D 0 1 (北から)
S D 0 1 畦B断面 (西から)	A地区 S D 0 2 (南から)
写真図版4 S D 0 2 畦A断面 (西から)	A地区 S D 0 3 (西から)
S D 0 2 畦C断面 (西から)	A地区 S D 0 4 (西から)
写真図版5 S D 0 3 畦A断面 (北から)	A地区調査風景 (南から)
遺物出土状況 (南から)	出土遺物



第1図 遺跡の位置（日本全図・全県・市域・周辺）

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

一般県道平荘大久保線道路改良事業計画に伴い、兵庫県加古川土木事務所より平成4年11月17日付け、
加土第3044号で事業範囲内の埋蔵文化財の所在について兵庫県教育委員会に分布調査の依頼があった。
これを受け、平成4年11月24日、分布調査を実施し、事業地区には埋蔵文化財が包蔵されている可能性
が高いことが判明した。さらに遺跡の有無や範囲を詳細に把握するために詳細分布調査を平成5年3
月29～31日に実施した（遺跡調査番号920390）。この結果、事業予定地の内、平成5年度事業範囲に
当たる3グリッド、23グリッドで遺構が検出された。

さらに平成6年度事業範囲内（センター杭No.38～85区間）にも埋蔵文化財が包蔵されている可能性が
あったため、所在について調査依頼があり（平成6年4月15日付け、加土第232号）、平成6年4月20
日に分布調査を実施した（遺跡調査番号940126）。その結果、全面調査の必要があること、さらに遺跡
の範囲を絞り込むために確認調査の必要があることを回答した（平成5年5月17日付け、教裡文第173
号）。この回答を受けて加古川土木事務所から全面調査と確認調査の依頼があり（平成6年4月15日付
け、加土第232号）、全面調査と確認調査を実施した。また、平成6年11月1日付け、加土第2849号にお
いて調査依頼があり、確認調査を実施した。

第2節 確認調査の経過

詳細分布調査（平成4年度） 遺跡調査番号920390

調査担当者 企画調整班 種定淳介

調査第3班 藤田 淳

調査期間 平成5年3月29～31日

調査面積 124m²

調査結果 3グリッド、23グリッドで遺構が検出された。

確認調査（平成6年度） 遺跡調査番号940259

調査担当者 調査第3班 山田清朝 三原慎吾 高井治巳

調査期間 平成6年11月14～15日

調査面積 288m²

調査結果 埋蔵文化財の包蔵を確認することができなかった。

第3節 全面調査の経過

天神前遺跡（平成5年度） 遺跡調査番号930169

前記の詳細分布調査（調査番号920390）の結果を受けて平成5年9月14日付け、加土2039号の依
頼により、遺構が発見された3グリッドを中心として全面調査を実施した。

発掘調査に当たっては、兵庫県教育委員会が株式会社三宅建設と委託契約を締結し実施した。

発掘調査事業参加者

調査担当者　主　　査　　岡崎正雄
臨時の任用職員　岡本一秀
現場補助員　（故）田中　勝　進藤眞己子
調査期間　平成5年12月7～18日
調査面積　194m²
調査結果　第3章参照

山中遺跡（平成6年度）　遺跡調査番号940068

前記の詳細分布調査（調査番号920390）の結果を受けて平成6年4月15日付け、加土第232号の依頼により、遺構が発見された23グリッドを中心として全面調査と確認調査を実施した。

発掘調査事業参加者

調査担当者　主　　査　　村上泰樹
技術職員　鐵　英記
技術職員　中村　弘
臨時の任用職員　國本綾子
調査期間　平成6年4月20～26日
調査面積　363m²
調査結果　第4章参照

第4節 整理作業の経過

出土遺物の整理作業は、平成14年度より埋蔵文化財調査事務所において実施した。

平成14年度　接合・補強・復元・実測・写真撮影・遺構図補正・トレース・レイアウトを実施した。

整理作業参加者

整理担当職員　非常勤嘱託員
技術職員　岡本一秀　企画技術員　吉田優子　喜多山好子　眞子ふさ恵
　　国化技術員　石野照代　中田明美　藏　幾子　大仁克子
主任技術員　柏原美音
国化技術員　津田友子

天神前遺跡調査日誌

全面調査　平成5年12月7～18日

- 12月7日　　調査開始。機械掘削開始。詳細分布調査のグリッドを再発掘して土層を確認し、客土層を除去する。
- 12月8日　　客土、搅乱土の機械掘削を行う。調査区と詳細分布調査時に検出した遺構の平板実測を行う。詳細分布調査時に検出した遺構をSD01、SD02と呼称し、続

- きの検出を行う。SD02の底面より東播系須恵器の碗片が出土する。
- 12月9日 調査区の東側より新たな溝SD03を検出する。SD01・02の土層断面図の実測を行う。
- 12月10日 SD01・02・03の検出作業を行う。土層観察の結果SD02の上層はシルト層が、下層は洪水砂礫が堆積していることがわかった。降雨のため、午後からは現場作業を中止する。
- 12月13日 調査区の南側の道路擁壁の掘方が掘削されており、急遽SD01・02の土層断面の実測を行うと共に調査区の南側も追加調査を行うように協議した。
- 12月14日 午前中は降雨のため、現場作業は中止する。午後より各溝の土層断面の実測を行う。
- 12月15日 検出した各溝にサブトレーナーをいれ、上層の堆積状況を確認しながら細部調査を行う。
- 12月16日 追加調査区の遺構の検出を開始する。
- 12月17日 追加調査区を含めた全体の遺構の掘削を完了する。午後から全景写真・遺構の細部の写真撮影を行う。遺構より出土した遺物の検討の結果、SD01は奈良～平安時代、SD02は平安～鎌倉時代に使用されていたことがわかった。
- 12月18日 遺構の細部の実測をすべて完了し、調査を終了する。

山中遺跡調査日誌

全面調査 平成6年4月20～26日

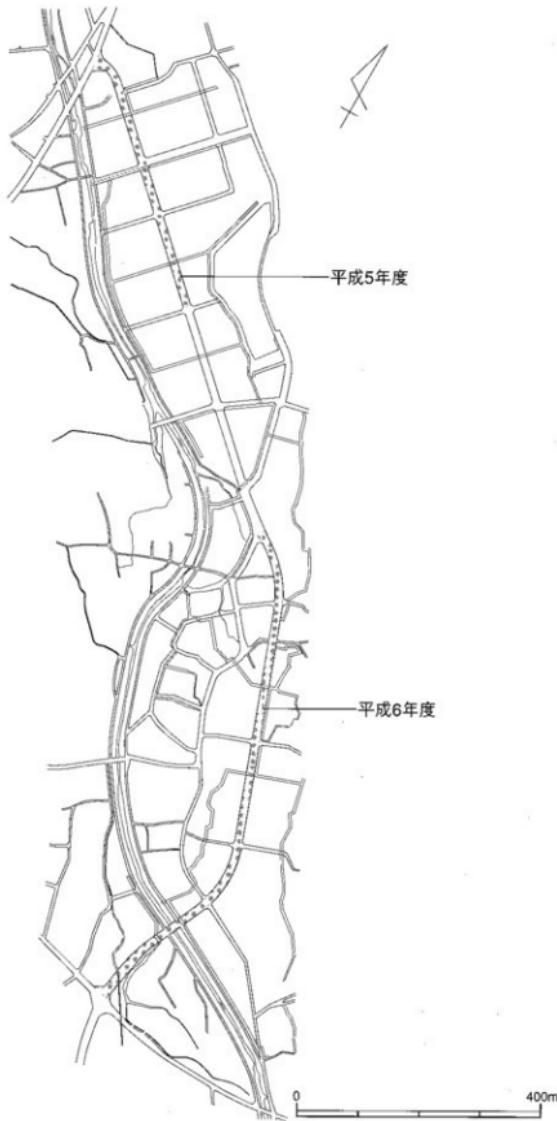
- 4月20日 調査区の設定を行い、A区の機械掘削開始。一部人力掘削も開始。
- 4月21日 A区及びB区の機械掘削を行う。A区については人力掘削を行い、溝を検出し掘削する。
- 4月22日 A・B区の人力掘削を行う。溝を完掘し、A・B区の掘削作業を完了する。両地区の溝の断面写真及び全景写真を撮影する。また、調査区の壁の土層断面図を作成する。
- 4月25日 A地区の溝の断面の実測を行う。C地区の人力掘削を行い、全景写真を撮影する。調査区壁面の土層断面図を作成する。
- 4月26日 A・B区の平面図を作成し、調査を終了する。



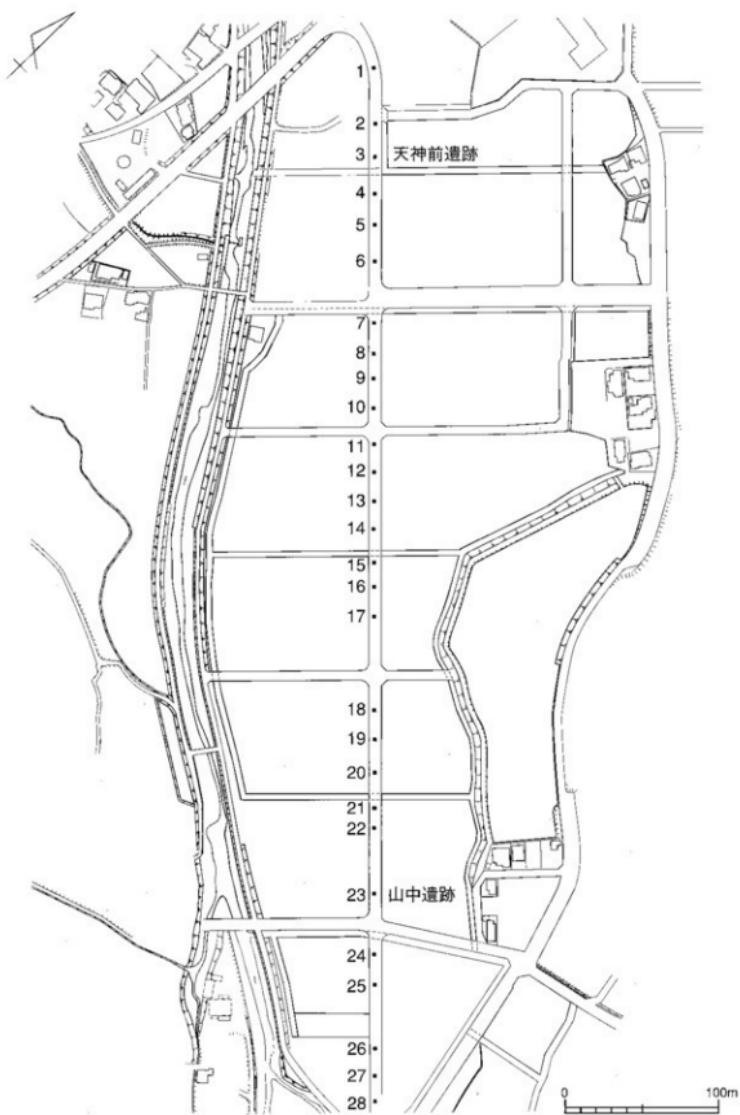
写真1 調査風景



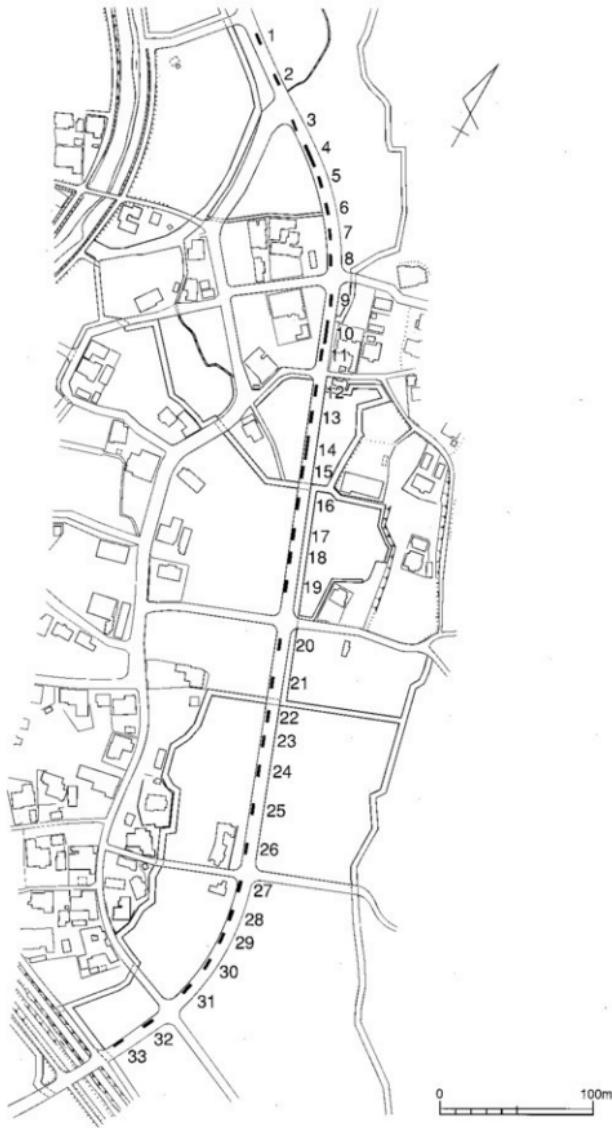
写真2 調査風景



第2図 平成5・6年度分布調査範囲図



第3図 平成4年度詳細分布調査トレンチ位置図



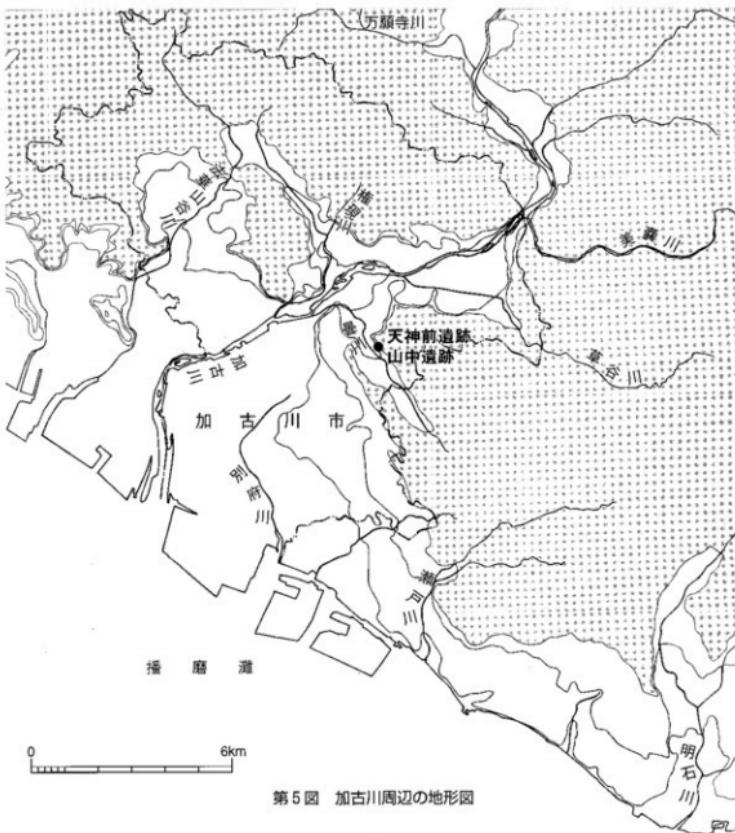
第4図 平成6年度確認調査トレンチ位置図

第2章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

天神前遺跡と山中遺跡は、兵庫県加古川市神野町石守に所在する。加古川市の市域は、東西約16km、南北約18km、面積は約138.51km²の範囲に及び、北側を加西市・小野市、東側を加古郡稻美町・播磨町、南側を瀬戸内海、西側を高砂市・姫路市と接している。

加古川市は、旧の播磨国に属していた。播磨国は市川を境に東播磨と西播磨と呼称され、加古川市は、東播磨の中心的な位置を占めている。加古川市の市域の中心を北東から南西へと二分するように流れる加古川の北側は印南郡、南側は加古郡（賀古郡）であったが昭和25年に加古郡の加古川、野口、平岡、尾上の5つの町村が合併し、加古川市として市政を施行、さらに昭和30年代に印南郡の一部を、昭和54年には志方町を合併して、人口約26万5千人の現在の加古川市となっている。



第5図 加古川周辺の地形図

加古川市の全体的な地勢は、第5図のように加古川から東の印南野地域は、神戸市西区神出町の難岡山を頂点として、南西方向に扇状地帯に低くなる高位段丘層の裾の部分に当たる。市の北部から西部にかけては、標高304.2mの高御位山を最高峰とする山地が北西方向の姫路方面へと連なっている。この山地は、流紋岩質溶結凝灰岩を基盤としている。このあたりの流紋岩質溶結凝灰岩は、産出する場所の地名を取って竜山石、長石、高室石などの名前で呼ばれている。竜山石は、加工しやすいことから古墳時代には古墳の石棺材として利用されており、畿内はもとより但馬、丹波、吉備方面に至る広い範囲で用いられている。現在でも、各種の土木・建築用材として需要は続いている。市の中心部を含む南部は、加古川の氾濫原や三角州から形成された低地になっている。低地のうち加古川左岸は五ヵ井用水の開削により、古い時期から開発が進められてきた地域である。南端の海岸部は、昭和39年に工業整備特別地区に指定されてから、重化学工業を中心とした播磨工業地帯として、埋め立てによる開発が進んだ結果、純自然海岸は消滅している。

市域の中央を流れる加古川は、兵庫県氷上郡青垣町を源とし、佐治川、篠山川、美義川、万願寺川などと合流しながら瀬戸内海へと注ぐ。その全長は86.5km、流域面積は1835 km²を測り、兵庫県内で第1の全長と流域面積を誇る河川である。氷上郡氷上町には、瀬戸内海へ流れる加占川と日本海へ流れる由良川を分かつ分水嶺がある。この分水嶺は、本州の瀬戸内・太平洋側と日本海側を分ける分水嶺の中でも最も標高が低いとされる。双方を行き来するには比較的容易であったため、古来より重要な交通路になっており、「水上回廊」の別名で呼ばれる。また、加古川は豊富な水量であることから、中世の豊臣秀吉の時代に内陸部と瀬戸内を結ぶ重要な舟運のルートとして着目され、川底の浚渫や高砂灘の整備、堀川の開削が行われ、奥丹波と東播磨の年貢や物資の輸送の主要なルートとなった。しかし、大正12年の鉄道開通以降は、物資輸送の中心が鉄道に取って代わられ、加古川の舟運は衰退してしまった。

天神前遺跡、山中遺跡のすぐ南を流れる曇川は、加古川の支流で稻美町北山の満溜池を源として北西方向に緩やかに蛇行して流れる全長7.5kmの河川で、稻美町中村で国安川と合流し、加古川市の福留・石守を経て神野町西之山付近で加古川と合流する。川の深さは比較的浅く、勾配も小さい河川であるが、たびたび氾濫をおこしていたという。曇川の右岸には、加古段丘が、左岸には日岡段丘が広がっている。加古段丘は河川による浸食と堆積により形成されたのに対し、日岡段丘は地球温暖期の海進による浸食と氷期の海退の繰り返しによって形成された段丘である。

第2節 歴史的環境

加古川市周辺は、西日本でも有数の旧石器時代の遺跡の集中地帯として知られている。そのほとんどが、標高10m以上の段丘の上に位置している。平岡町山之上遺跡や志方町七ツ池遺跡など約40箇所の遺跡が知られており、その半数は志方町内に分布している。

加古川市域の主な縄文時代の遺跡は、後期中葉の志方町東中遺跡や後期の八幡町宮山遺跡、晩期の砂部遺跡、岸遺跡が知られており、その分布は加古川右岸に偏っている。加古川市に隣接する高砂市にある日笠山貝塚は、縄文前期～後期にかけての土器を伴い、播磨地方で現在確認されている数少ない貝塚である。

弥生時代前期の遺跡は、土器焼成遺構が検出された砂部遺跡や弥生時代前期後半の溝が検出されている東神吉遺跡がある。溝之口遺跡と美乃利遺跡では弥生時代前期後半の遺構が見つかっている。弥生時

代中期～後期にかけては米田遺跡がある。八幡町上西条字東沢からは、大正年間に銅鐸が出土している。弥生時代中期後半の遺跡は、中西台地遺跡（標高10m）や平山遺跡（標高20m）、野村遺跡（標高55m）、西条庵寺下層遺跡（標高30m）がある。これらの遺跡は、眺望が良い場所に立地している点で共通しており、高地性集落と考えられる。弥生時代後期の遺跡は、加古川左岸では溝之口、今福、長砂、栗津、北在家、大中の各遺跡がある。加古川右岸には砂部、岸、升田、天下原、神爪遺跡B地点遺跡がある。弥生時代終末には、西条52号墳や神吉山5号墳のように列石を持つ墳丘墓が築かれる。

古墳時代の遺跡には溝之口、砂部、北在家遺跡など弥生時代から続く集落がある。とくに砂部遺跡からは、渡来系の土器が出土しているほか石製模造品、ガラス小玉、銅鏡が出土している。加古川市域で古い時期の古墳は、日岡山古墳群がある。日岡山1号墳、南大塚、勅使塚、西大塚、北大塚の5基の前方後円墳を含む8基の古墳からなり、日岡山1号墳が一番古く4世紀代の築造と考えられている。その次に前方後円墳が築かれるのは西条古墳群である。行者塚古墳と人塚、尼塚の3基からなり、行者塚古墳は、全長約99mの前方後円墳で、5世紀前葉の築造と考えられている。人塚と尼塚は帆立貝式で、築造時期はさだかではないが、行者塚古墳と前後する時期と考えられている。行者塚古墳の築造以降、加古川流域の古墳の築造は加古川右岸に移る。長慶寺山1号墳は、4世紀代の築造と考えられる前方後円墳である。小畠古墳は、5世紀後葉の築造と考えられる古墳で調査の結果、前方後円墳であることがわかった。また、平荘洞に水没したカンヌ塚古墳は、竪穴式石室を主体とし、鉄製農具、鍛冶具、金製垂飾付耳飾り、初期須恵器などが副葬されている。このことから被葬者は、渡来系の人物であることがうかがえる。聖陵山古墳は、現在は海岸から約4km離れた位置にあるが、築造当時は海岸線の間近に位置していた古墳で、主体部は竪穴式石室だったと考えられている。築造の時期は、出土遺物などから4～5世紀と推定され、海の豪族の墓と考えられている。6世紀以降になると群集墳が営まれるようになり、加古川市域で代表的なものには日岡山古墳群、西条古墳群、平荘湖古墳群があるが、姿を消したものが多い。終末期になると切石づくりの石室が出現する。地蔵寺古墳がその例で、小型の横穴式古墳であるが石材の接合部が盤で丁寧に整えられている。築造の時期は7世紀第3四半期と考えられる。

加古川市域には、古代に区画された条里地割りが現在も残されている箇所がある。播磨国の条里地割りの特徴は、阡縦と陌縦が正方位より傾いた地割りが多いことである。天神前遺跡周辺の加古川左岸では加古川町大野、美乃利、溝之口、尾上町、野口町、別府町のあたりまでの広い範囲に条里制が遺存しているが、N44°～43°Eの方位に傾いている。このあたりの条里の方位が正方位よりもふれているのは、現在の平岡町から高砂市神爪までを直進する古代山陽道を基準に区画を設定した為である。

古大内遺跡は、播磨国府系の瓦の出土が著しいことから廐寺跡と考えられた時期もあったが、その後の研究により現在では、古代山陽道の賀古駅家の跡地に比定されている。賀古駅家は馬40疋を置く日本最大の駅家であったといわれるが、高橋美久二、浅田芳郎氏は、これは印南郡の佐穴駅家が一時的に廐止になり、そこの馬を引き取ったために一時に馬の数が40疋になったと考えている。

加古川市域を通る古代山陽道のルートについて足利健亮氏は、明石市所在の仮称邑美駅家跡の長坂寺遺跡から古大内遺跡の北西をかすめて直線的に高砂市神爪まで伸びる説を探っている。また、木下良氏は賀古駅家を出て西は日間に向かい加古川を渡り升田、神吉、中西、大国を経由し魚崎に出る迂回コースも想定している。これは、このあたりが加古川の氾濫原であったため、こちらのルートの方が現実的であるだろうとする説である。おそらくは山陽道の制定当初は直進コースであったのが、やがて迂回コースに変わったとも考えられている。

賀古郡街の推定地には諸説がある。通常、郡衙が置かれた里を郡家里と名付けたり、「コオリ」の字が残る場合があるが、播磨国の場合、それらの手がかりとなる残された地名は無い。吉本昌弘氏は、郡衙跡や推定地が「一郡一寺」的に郡衙と寺が近接して造営される例が多いことに着目し、野口庵寺北西の正南北方位の方格地割りを候補地と推定している。

天神前遺跡・山中遺跡の最も近くに位置する古代寺院は、石守庵寺である。石守庵寺は、法隆寺式の伽藍配置で石積基壇の塔と瓦積基壇の金堂がある。創建の時期は8世紀前葉と考えられ、9世紀まで存続したと見られる。その他の加古川左岸の古代寺院には西条庵寺、野口庵寺がある。西条庵寺は法隆寺式の伽藍配置で、塔、金堂共に瓦積基壇である。野口庵寺は未調査のため、伽藍配置等詳細は不明であるが、礎石や塙状の隆起などが確認されている。

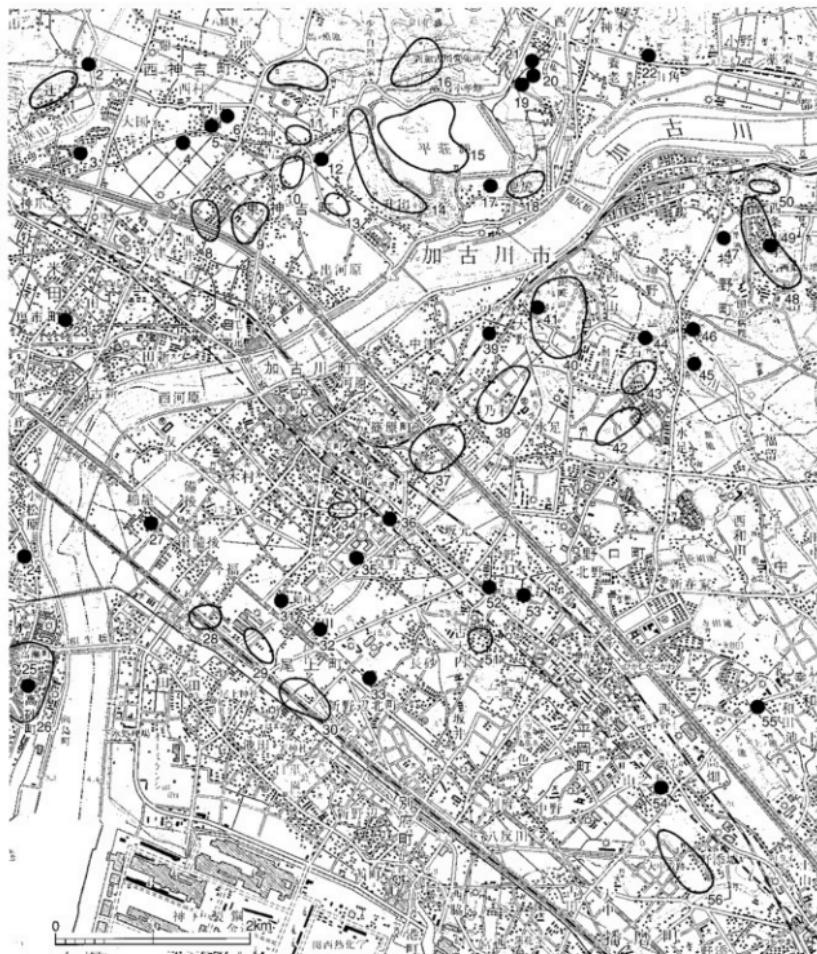
加古川市域には古代、中世から現代まで続く寺院もいくつかある。常楽寺は14世紀前葉に建立の五重塔・層塔・板碑などが現存する寺院で、周辺からは12世紀末から13世紀前半の神出窯産の瓦が出土する。鶴林寺は聖徳太子建立と伝える寺院であるが、実際は平安時代後期に四天王寺として建立され、鳥羽上皇の勅願所となり鶴林寺に名を改めている。本堂、太子堂が国宝に指定されているのをはじめ、常行堂、鐘楼、護摩堂、行者堂が重要文化財に指定されている。常光寺は永正年間（1504～21）に建立と伝えられ、戦国期の手末構造の跡である。境内には赤松義村の墓とも伝えられる五輪塔がある。

播磨国は、「延喜式」に須恵器の調納国として記載されていた。加古川市域周辺での須恵器生産の開始時期は7世紀中頃に遡る。上莊町白沢の白沢窯跡群での操業がその始まりと考えられる。この地は、旧印南郡に属するが、加古川に面しており、旧賀茂郡、旧美濃郡、旧賀古郡の郡境と接している場所に当たる。白沢窯跡群では、8世紀初頭まで生産が続けられる。8世紀前半以降になると、須恵器生産の中心は、志方町から加西市にかけての旧印南郡と旧賀古郡の郡境に移る。志方町の西ノ池1号窯は、志方窯跡群の中でも古い時期に操業を開始している。志方窯跡群は、中谷、札馬、投松、蕉谷、中津倉等の15の支群からなり、窯の総数は現在確認されているだけで150基以上にのぼる。生産された製品は、平城京や平安京に運ばれていたほか、加古川周辺でも消費されていた。志方窯跡群は8世紀後半から9世紀後半にかけて全盛期を迎え、やがて10世紀になると廃れてしまう。11世紀になると三木、神出、魚住の地で、いわゆる東播系須恵器の生産が行われるようになる。ここでは捏鉢、塊、皿、甕の他に瓦も生産された。この瓦は、京都の法勝寺などに運ばれたほか、小野市の淨土寺でも使用された。生産の拠点も最初は三木であったのが神出に移り、最終的には魚住に移動している。これは舟運の便のいい海の近くへと生産拠点を移動させたためともいわれる。しかし、14世紀になると播磨産の窯業製品は、品質や運搬の便の面で有利な備前の製品に取って代わられるようになり、再び廃れてしまう。

※平成14年に兵庫県教育委員会により神出窯が調査され、11世紀よりも古い時期の窯が発見された。このため、神出窯の評価は今後変わってくる可能性がある。

参考文献

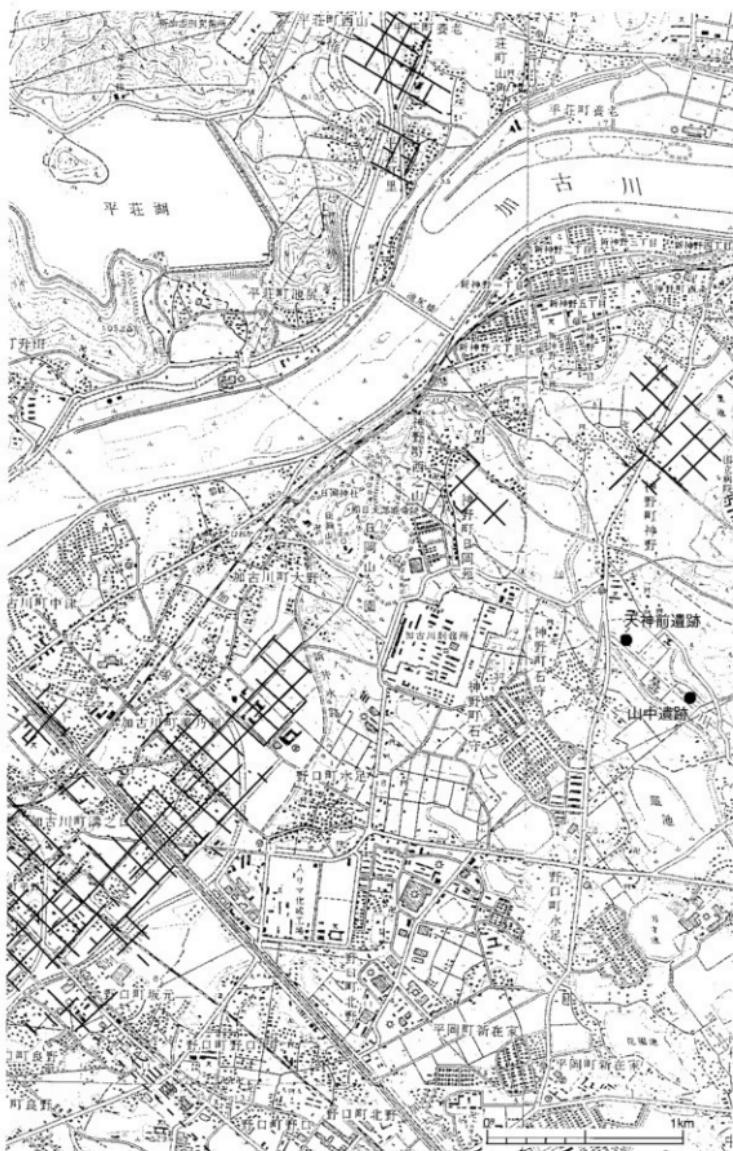
- 『加古川市史』第1巻 1983年3月
- 『加古川市史』第4巻 1996年3月
- 『兵庫県の地名II』日本歴史地名体系29II
- 『地中に眠る古代の播磨』1999年12月
- 『山陽道（西国街道）』歴史の道調査報告書 第2集 1992年3月
- 『古代を考える 古代道路』1996年4月



第6図 周辺の遺跡

1 汗古墳群	13 升田遺跡	25 東宮町遺跡	37 満之口遺跡	48 西条古墳群
2 大国山遺跡	14 升田山古墳群	26 高砂町遺跡	38 美乃利遺跡	49 西条麻寺
3 岸遺跡	15 平莊湖古墳群	27 稲屋横堀遺跡	39 大野遺跡	50 城山遺跡
4 中西低地遺跡	16 霧盛山古墳群	28 今福遺跡	40 日岡山古墳群	51 古大内遺跡
5 中西庵寺	17 平山遺跡	29 尾上遺跡	41 常楽寺	52 教信寺
6 中西台地遺跡	18 地蔵寺古墳群	30 浜の宮遺跡	42 水足古墳群	53 野口庵寺
7 神富山古墳群	19 西山大塚	31 鶴林寺	43 石守古墳群	54 長烟遺跡
8 東神吉遺跡	20 里古墳	32 安田橋居跡	44 石守麻寺	55 平見遺跡
9 砂部遺跡	21 西山遺跡	33 長砂遺跡・裂腹山古墳	45 天神前遺跡・	56 大中遺跡
10 神吉南遺跡	22 山角庵寺	34 麻津遺跡	46 山中遺跡	
11 神吉遺跡	23 米田遺跡	35 北在家遺跡	47 常光寺	
12 天下原遺跡	24 春田遺跡	36 平野遺跡	48 神野遺跡	

第1表 周辺の遺跡



第7図 加古川市域の里

第3章 天神前遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

天神前遺跡は、加古段丘と日岡段丘の間を南東から北西方向に開析して流れる曇川の右岸の氾濫原に立地している。この地点から約2km下流は、加古川との合流地点である。遺跡の北西は印南野台地に続く丘陵地帯になっている。

第2節 遺構

天神前遺跡で確認できた遺構は、溝3条である。東西方向が2条、南北方向が1条を検出した。

S D 0 1 (図版5、写真図版3)

検出状況 東西方向に直線状に検出された。

形状・規模 検出した延長は、約14m、幅は最も広いところで1.4mを測る。断面は浅い「U」字状を呈する。検出面からの深さは最深部で0.35mを測る。溝底部の高低差より、流れは西方向であったと考えられる。

埋没状況 埋土は3層に分けられる。上層は暗褐色極細砂、中層は黒褐色のシルト質細砂、下層は褐色シルト質極細砂である。溝が掘削されてから埋没するまで緩やかな流れであった。埋土の上層から中層にかけて杭が2本打ち込まれており、溝の埋没する最終段階近くに何らかの施設を作ったと考えられる。杭のすぐ横から土師器台付皿が出土している。

出土遺物 上層の暗褐色細砂から備前焼插鉢(3)、東播系須恵器捏鉢(1)須恵器碗(2)、土師器台付皿(4)が出土している。

S D 0 2 (図版5、写真図版4)

検出状況 S D 0 1 の北側に平行して検出された。

形状・規模 検出された延長は約16.5m、幅は最も広い部分で2.4mを測る。断面は浅い「U」字状を呈する。西側の端は南側に直角に曲がる。検出面からの深さは最深部で0.45mを測る。S D 0 1 と関連する遺構と考えられる。また、溝底部の高低差より流れは西方向であった。

埋没状況 埋土は3層に分けられる。上層は黒褐色シルト質極細砂、中層は褐色中砂、下層は褐色シルト質極細砂である。埋土の堆積状況から、掘削当初は、緩やかな流れであったのが、一時期かなり強い流れになり、再び緩やかな流れに戻った後に埋没したと考えられる。

出土遺物 青磁碗(16)、須恵器碗(11、12、13)、捏鉢(14、15)、坏B(6、7)、甕(9、10)が出土している。

S D 0 3 (図版5、写真図版5)

検出状況 S D 0 1 、S D 0 2 と直交して検出された。断面は浅い「U」字状を呈する。

形状・規模 検出した延長は6mを測る。検出面からの深さは最深部で0.25mを測る。

埋没状況 埋土は4層に分けられる。上層から暗褐色極細砂、黒褐色シルト質極細砂、にぶい黄褐色中砂、褐色シルト質極細砂である。埋土の堆積状況より、溝の掘削時は強い流れがあったが、一旦緩やかな流れとなり、埋没する直前に少し強い流れがあったと考えられる。

出土遺物 坏A(17)が出土している。

第3節 遺物

全体の概要

出土総量は、28%入りコンテナで1箱分であるが、その大半は破片であり、そのうち図化できるものはわずか17点であった。出土した遺物の時期は、奈良時代のものと中世のものとに大別できる。

須恵器

壺A（5、17）

5は口縁部のみ出土した。内外面共に横ナデが施されている。17は底部のみ出土した。遺物の時期は8世紀代と考えられる。

壺B（6、7）

6は底部から口縁部まで、7は底部のみ図化できた。体部と底部の境界は、明瞭である。高台はやや外側に踏ん張るタイプである。遺物の時期は8世紀代と考えられる。

壺（8）

壺の肩部のみ図化できた。長頸壺の肩部になると思われるが、平瓶の肩部の可能性もある。

甕（9、10）

9は古墳時代終わり頃の甕の口縁部である。厚さは薄い目で口縁端部が肥厚している。口縁端部の外側には斜めの刻み目文がある。10も古墳時代終わり頃の甕の口縁部である。頭部の立ち上がりは短く、端部が肥厚している。

壺（2、11、12、13）

東播系須恵器の壺である。2、11、12は口縁部のみが図化できた。11は体部がやや厚めである。13は完形で出土した。見込みのへこみは無い。遺物の時期はいずれも12世紀後半と考えられる。

捏鉢（1、14、15）

東播系須恵器の捏鉢である。1は口縁部のみ図化できた。口縁端部の内側が張り出し、端部が外傾するタイプである。14も口縁端部のみ図化できた。口縁端部の内側が張り出し、端部が外傾するタイプである端部の中央に強いナデが施されている。15は底部のみが図化できた。内面は回転ナデのち斜め上方に仕上げナデが施されている。遺物の時期は12世紀後半と考えられる。

土師器

台付皿（3）

脚部のみが出土した。内外面ともに横ナデが施されている。遺物の時期は10世紀中頃～後半と考えられる。

備前焼

捏鉢（4）

口縁部のみが出土した。堺か明石産の捏鉢である。口縁は円帯と2条の沈線がめぐる。捕目は9本を単位としている。遺物の時期は18世紀前半の時期と考えられる。

青磁

碗（16）

口縁部のみ出土した。龍泉窯系の青磁碗である。口縁が玉縁状で暗黄緑色の釉がかかり、荒い貫入が入る。遺物の時期は16世紀代と見られる。

第4章 山中遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

山中遺跡は、加古川の支流である曇川の右岸に位置し、神野台地の南端にあたる。台地からは南東方向に尾根が延びており、遺跡は先端付近から曇川に向かって下ったところに立地している。遺跡の北東側には台地に刻まれた谷があり、現在は堰き止められて茨谷池が造られている。

調査はA～C地区の3地区に分けて行った。遺構はA地区のみで検出されており、C地区は調査区の幅が狭いため、断面でのみ確認している。B地区は第2次確認調査として掘削しており、遺構は確認されなかった。

検出された遺構は溝4条のみで、出土遺物は第1次確認調査時に石礫（S1）が出土したほか、古墳時代後期の須恵器片が若干出土したのみである。

第2節 遺構

山中遺跡で確認できた溝は4条である。いずれも不整形で、規則性は認められない。

S D 0 1 (図版7・8、写真図版9・10)

検出状況 S D 0 2 から南方向に派生して検出された。

形状・規模 検出した延長は約3.8m、幅は最も広いS D 0 2付近で約4.2m、狭いところで約1.0mを測る。断面は浅い皿状を呈する。検出面からの深さは約0.1mを測り、浅い。

埋没状況 埋土は褐灰色シルト質極細砂の1層のみである。

出土遺物 特に遺物は出土していない。

S D 0 2 (図版7・8、写真図版9・10)

検出状況 北東から南西方向で、調査区に直交して延びている。S D 0 1 が東側で派生し、S D 0 3 とは西側で接している。

形状・規模 検出された延長は約6.8m、幅は最も広いところで約4.2mを測る。断面は浅い皿状を呈する。全体に不整形で、調査区中央付近で弯曲している。

埋没状況 埋土は2層に分けられる。上層は暗褐色極細砂で、土壤化を受けている。下層はにぶい黄褐色中砂から極細砂質シルトである。

出土遺物 特に遺物は出土していない。

S D 0 3 (図版7・8、写真図版9・10)

検出状況 S D 0 2 と S D 0 4 の間で検出された。北西から南東方向に延びる。

形状・規模 検出された延長は約13.5m、幅はほぼ一定で、約1.1mを測る。S D 0 4 の東側から派生し、南東方向に延びた後、S D 0 2 に接するように南へと方向をかえている。検出部分の中程で、南東側が浅くなり、底にゆるい段ができる。

埋没状況 埋土は2層に分けられる。上層は暗褐色シルト混じり極細砂、下層は褐灰色粗砂から極細砂である。

出土遺物 特に出土していない。

SD04 (図版8、写真図版9・11)

検出状況 SD03の西側、調査区の中央やや西寄りで、ほぼ東西方向に検出された。

形状・規模 検出された延長は約10.5m、幅約3.9mで、ほぼ一定の幅であるが、南西側が一段浅くなり、外側が大きく広がっている。調査区南西側で、東西方向から南側へ彎曲しており、C地区へと続いている。

埋没状況 埋土は6層に分けられる。上層から、にぶい黄褐色細砂～極細砂、黒色シルト、ラミナ、中疊～大疊（木片多い）、灰色細砂から粗砂（木片多い）、灰色細砂～粗砂（木片多い）、灰色細砂である。埋土の状態より、下層には粒度の大きい砂が堆積していることから、強い流れのもとで土砂が供給され、埋没後は浅くなってのち、安定して堆積していくと考えられる。また、下層については現在も水分が多く含まれていることから、木片が多く出土することとなった。

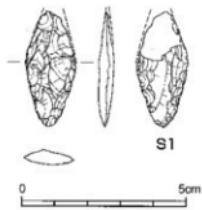
出土遺物 1層と3層から古墳時代後期の須恵器が出土したが、図化できなかった。

第3節 遺物

出土遺物は古墳時代後期の須恵器が若干出土したほか、石鎚が1点のみ出土したに過ぎない。このうち須恵器については小片のため、図化はできなかった。唯一図化できたのは、石鎚（S1）のみで、第1次確認調査で出土した。出土位置はA区のほぼ中央にある。

石鎚（S1）

サヌカイト製の凸基式石鎚である。片面上半部が欠損しているが、ほぼ完存である。加工は両面に認められるが、裏面の一部に素材面を残す。断面形は凸レンズ状を呈す。



第8図 山中遺跡出土石器

第5章 まとめ

第1節 天神前遺跡について

天神前遺跡では、溝を3条検出した。それぞれ東西方向が2条、南北方向が1条で正方位にのっている。溝の使用されていた時期は、出土した遺物より、東西方向のSD01が平安から戦国時代、SD02が奈良から鎌倉時代、南北方向のSD03が奈良時代と推定される。但し、近世以降の水田の開墾に伴う削平と盛土のため、各溝の最終的な埋没時期を判断することはできなかった。

溝の性格については、調査当初は溝が開削された時期より、条里制の水田に伴う溝である可能性もあると考えた。しかし、加古川市域で現在確認されている条里は、古代山陽道を基準にN44°Eに傾いて制定されており、今回検出された溝の方向とは異なるものである。正方位を軸線とする条里は、これまでのところ確認されていない。天神前遺跡の近辺でこれまでに調査された条里に伴う造構の例は、美乃利遺跡の調査で奈良時代の条里に伴う溝が確認されている。この溝は近世まで用水路として使用されていたもので、N44°Eの条里の方向にのっている。曇川近辺で条里の痕跡が確認されている地域は、第7図のように神野町神野、神野町日岡苑の一帯だけであり、その他の地域では確認されていない。図版1の調査区周辺の水田の地割りや写真図版1の空中写真を観察する限りでは、天神前遺跡周辺の水田地割りは、曇川の流路跡を反映して不規則なものであり、条里の痕跡を見いだすことができない。

今回の調査の結果から、検出された溝が条里に伴うものであるとする結論を出すには至らなかった。しかし、曇川周辺は、別の時期に正方位の地割りで開発されたのち、中世になって曇川の氾濫で埋没し、その後河川の流路を反映した地割りで再び耕地が開墾されたため、条里状の地割りが残らなかった可能性もある。

第2節 山中遺跡について

山中遺跡では、溝を4条検出した。方向は東西方向が1条、南北方向が1条、北東から南東方向が1条であるが、いずれも途中で屈曲しており、不整形で規則性がない。溝の時期は、SD04は出土遺物より古墳時代には形成されていたと判断できるが、その他については不明である。

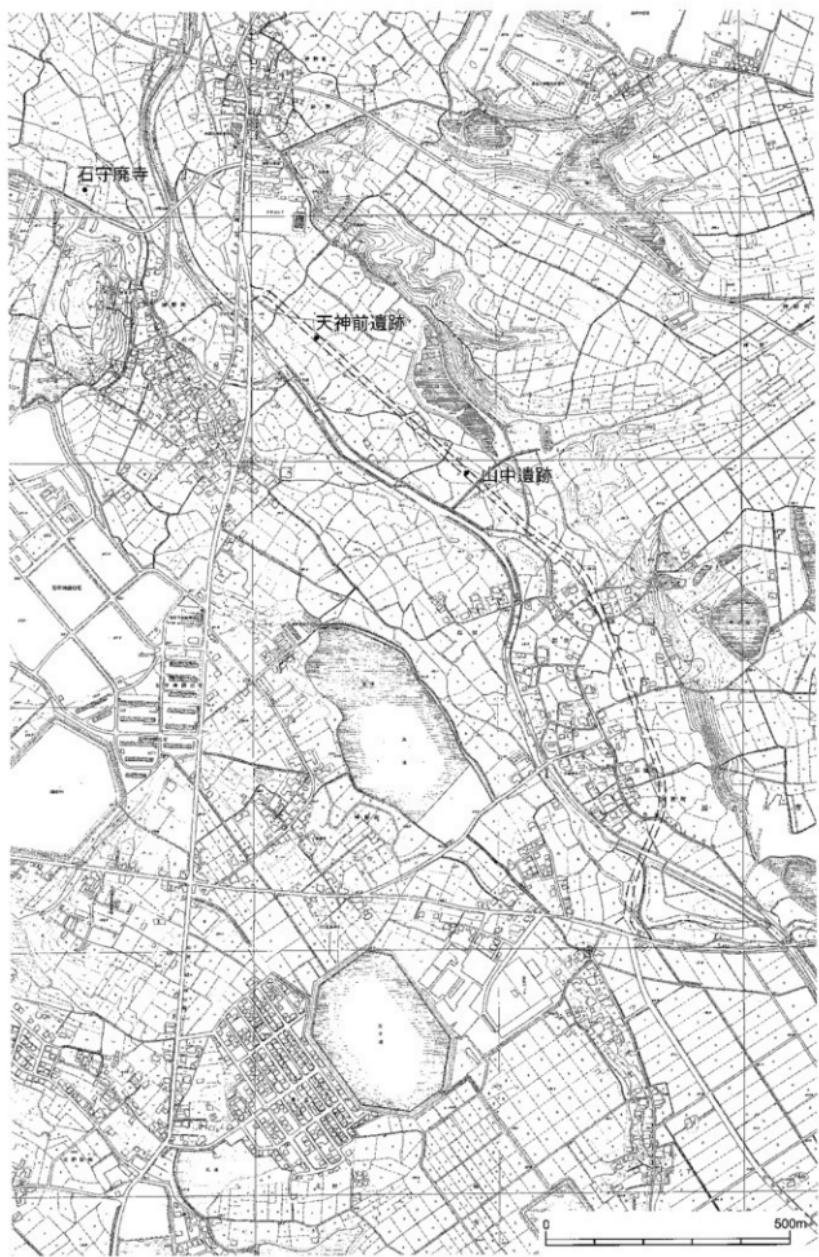
今回検出した溝の性格は、次のように推定される。山中遺跡の周辺は、曇川の氾濫原であり安定した土地ではなかった。遺跡の北東には神野台地を北東から南西方向へと開析する谷が存在し、遺跡はこれらの合流地点に当たる。このため遺跡一帯は、複雑な形状の自然流路が形成されており、SD01、02、04はその一部である。ただし、SD03は他の溝と比べると断面の形状が整っており、多少、人の手が加えられ、利用されていた可能性もある。

また、SD04に古墳時代の遺物が含まれることから、付近に集落が営まれていたと考えられる。集落の位置は、山中遺跡北東の段丘上か裾部と想定される。

第2表 天神前遺跡出土遺物観察表

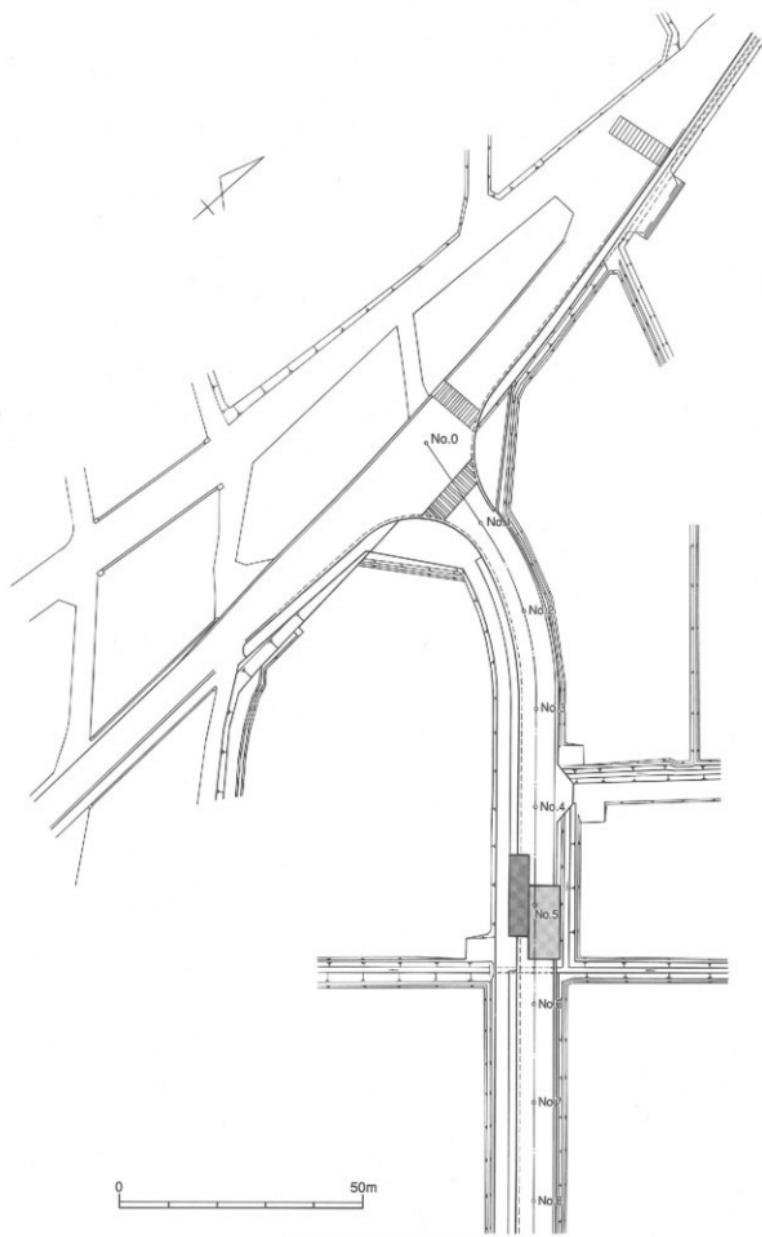
No.	器種	出土遺構	種別	口径(cm)	器高(cm)	残存率	調整及び備考
1	攢鉢	SD01	須恵器	27.0	2.6	口縁部のみわずか	内外面ともに回転ナデ
2	壺	SD01	須恵器	13.8	2.28	口縁部のみわずか	内外面ともに回転ナデ
3	潘鉢	SD01	陶器	24.4	4.4	口縁部1/12	外周回転ナデ、内面磨目9本単位
4	台付皿	SD01	土器		2.48	底部はぼば元存	底減のため調整不明
5	环 A	SD02	須恵器	13.58	2.57	口縁1/11	内外面ともに回転ナデ
6	环 B	SD02	須恵器	14.0	4.0	口縁1/13、体部1/6	内外面ともに回転ナデ
7	环 B	SD02	須恵器		2.45	体部、底部1/6	内外面ともに回転ナデ
8	長頸甕	SD02	須恵器		3.35	肩部1/6	内外面ともに回転ナデ
9	甕	SD02	須恵器	21.72	5.97	口縁部1/8	口縁部刻み目文、内外面ともに回転ナデ
10	甕	SD02	須恵器	18.2	5.8	口縁部1/24、頸隆1/6	体部外周平行タキ、内面青海波文
11	甕	SD02	須恵器	15.6	2.8	口縁部1/12	内外面ともに豊転ナデ
12	壺	SD02	須恵器	15.4	2.48	口縁部1/8	内外面ともに回転ナデ
13	壺	SD02	須恵器	15.5	4.34	完存	内外面ともに回転ナデ
14	攢鉢	SD02	須恵器	32.08	3.5	口縁部1/18	外周回転ナデ、内面回転ナデのち仕上げナデ
15	攢鉢	SD02	須恵器		3.8	底部1/18	体部内外面ともに回転ナデ、底部へラ切り
16	甕	SD02	青磁	14.6	2.2	口縁部1/18	ナデ後、施釉
17	环 A	SD03	須恵器		1.25	底部1/4	内外面ともに回転ナデ、底部回転ヘラ切り

図 版

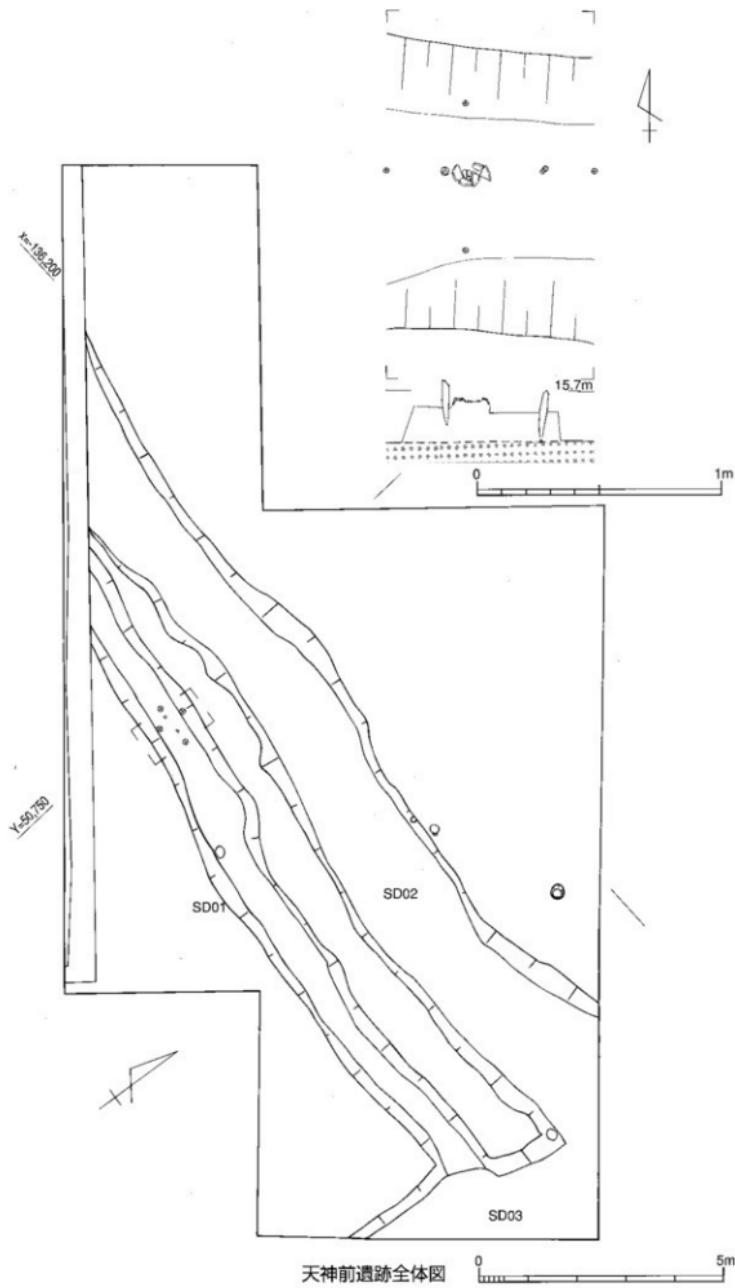


天神前遺跡・山中遺跡周辺図

図版2 天神前遺跡



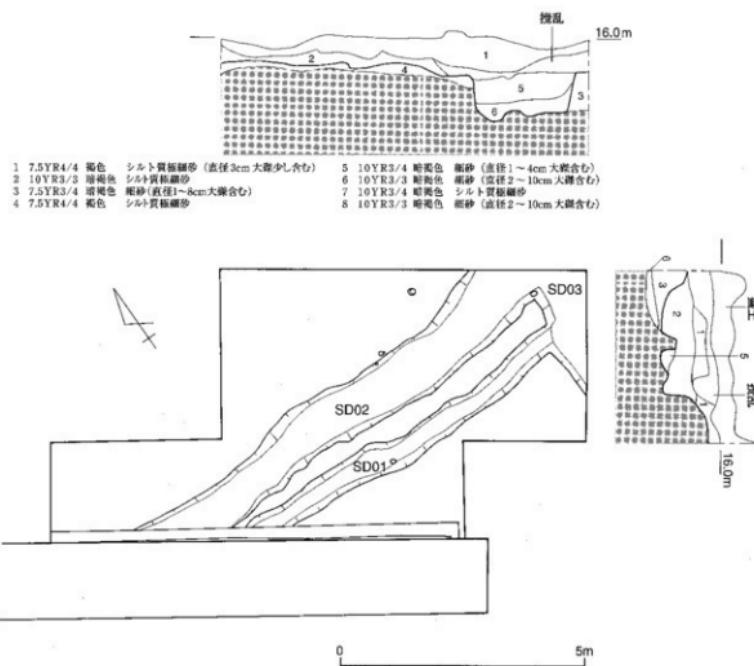
天神前遺跡調査区位置図



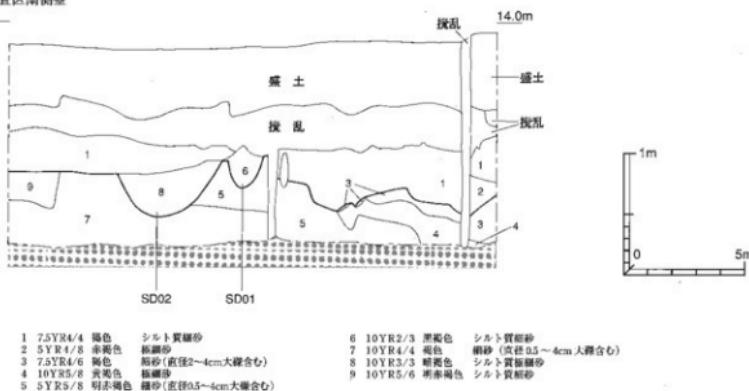
天神前遺跡全体図

図版4 天神前遺跡

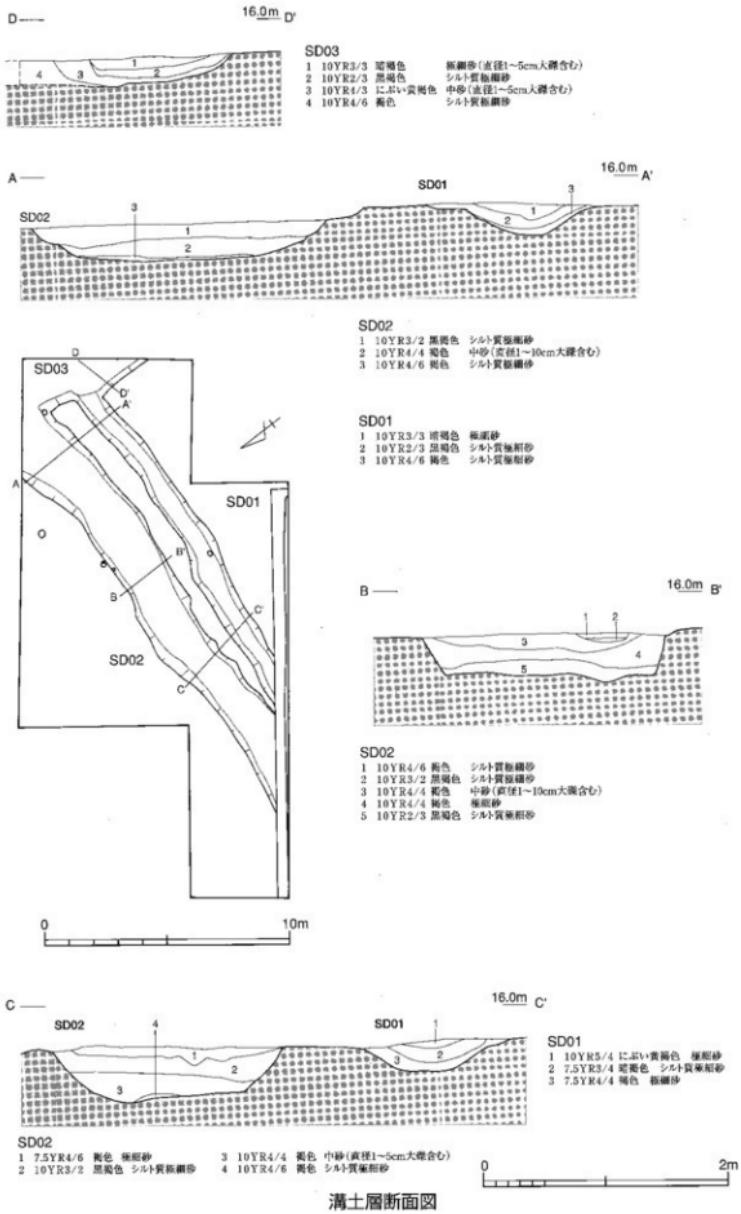
調査区北壁・東壁



調査区南側壁

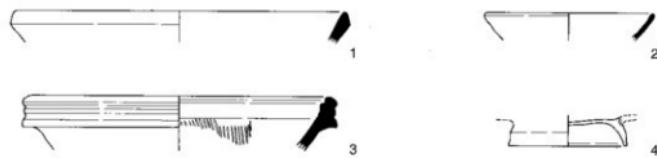


調査区壁土層断面図

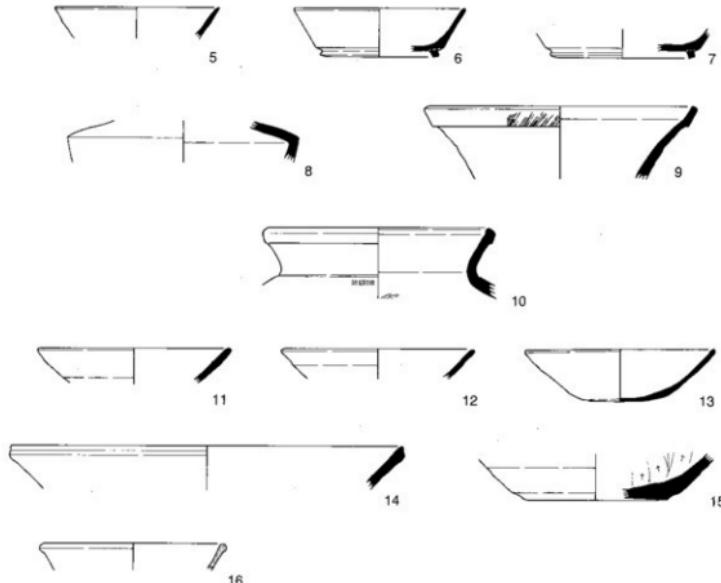


図版6 天神前遺跡

SD01



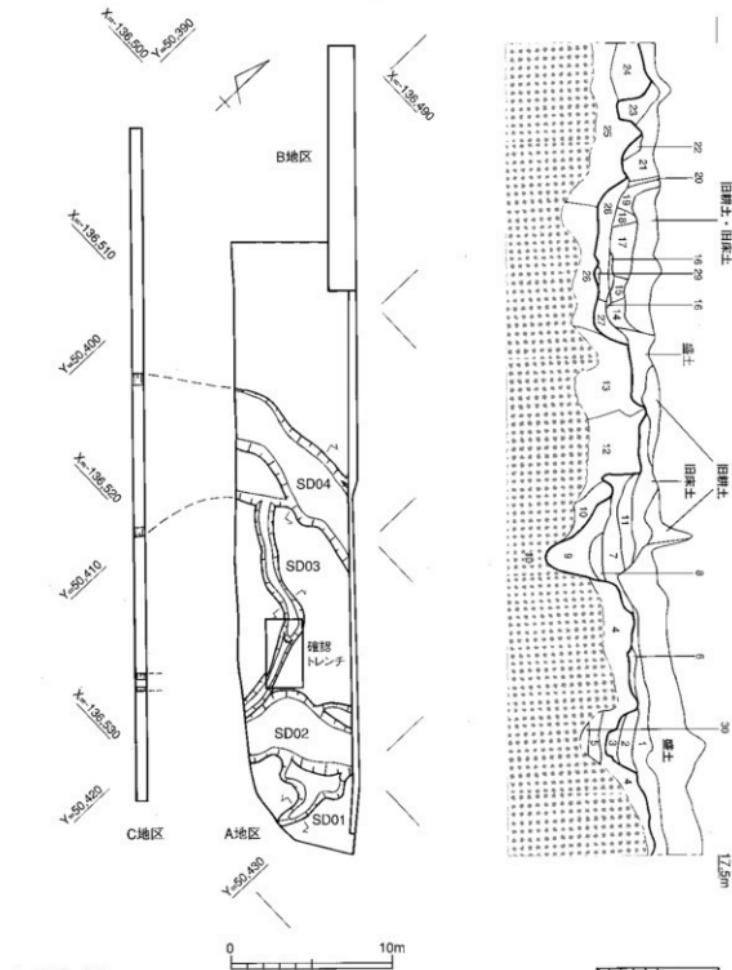
SD02



SD03



出土遺物



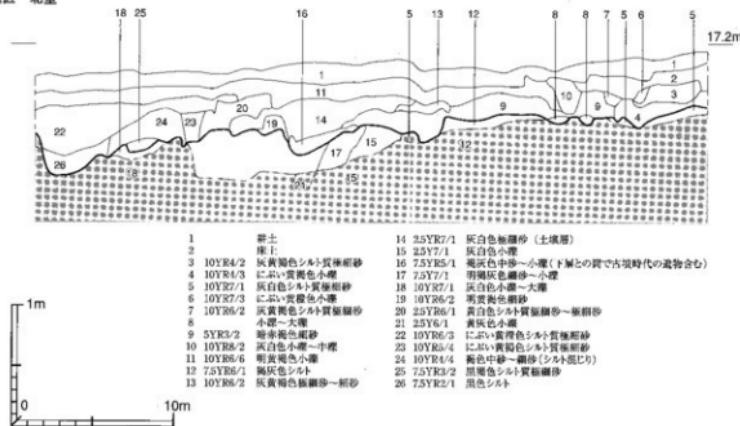
A・B地区 北壁

- 1 7.2V3/3 斧形石器細縫（土壤層）
 2 10V3/2 斧形石器細縫（土壤層）
 3 10V3/3 にない黄褐色～中紺～纏縫細縫シルト
 4 10V2/1 黑灰色～深黑色
 5 10V2/2 黑黃褐色シルト（土壤層）
 6 10V3/6 黑黃褐色細縫形シルト（土壤層）
 7 10V3/5 にない黄褐色細縫～纏縫（土壤層、古墳時代の遺物含む）
 8 6YR4/2 黑褐色シルト質纏縫（土壤層）
 9 7.5YR2/1 黑褐色シルト（土壤層、古墳時代の遺物含む）
 10 紗網層
 11 7.5YR3/2 透明白色纏縫層（土壤層）
 12 10YR7/2 にない黄褐色細縫～葉葉形
 13 莖葉層
 14 10YR6/3 にない黄褐色細縫
 15 10YR5/3 にない黄褐色細縫～中紺（土壤層）
 16 2.5YR6/3 にない黄褐色細縫～纏縫（土壤層）
 17 10YR5/4 にない黄褐色細縫
 18 10YR8/3 深褐色細縫シルト質無縫隙
 19 10YR6/2 にない黄褐色細縫（土壤層）
 20 2.5YR6/4 にない黄褐色シルト（土壤層）
 21 7.5YR3/2 黑褐色細縫（土壤層）
 22 7.5YR6/3 深褐色細縫小紺～大紺
 23 7.5YR6/4 深褐色細縫～中紺
 24 2.5YR4/3 にない赤褐色～中紺～小紺
 25 10YR7/3 にない黄褐色小紺～大紺
 26 2.5YR6/5 灰褐色細縫小紺～大紺
 27 2.5YR5/2 带灰褐色シルト質無縫隙（土壤層）
 28 2.5YR6/2 黄褐色細縫（土壤層）
 29 10YR4/4 紗網シルト質無縫隙（土壤層）
 30 2.5YR6/2 灰褐色小紺～大紺

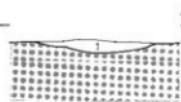
山中遺跡調査区平・断面図

図版8 山中遺跡

C地区 北壁

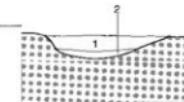


SD01



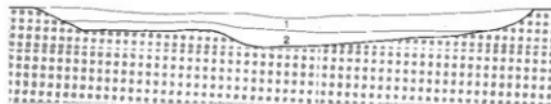
17.0m

SD03



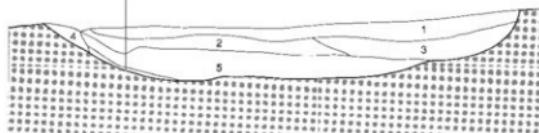
16.8m

SD02



17.0m

SD04



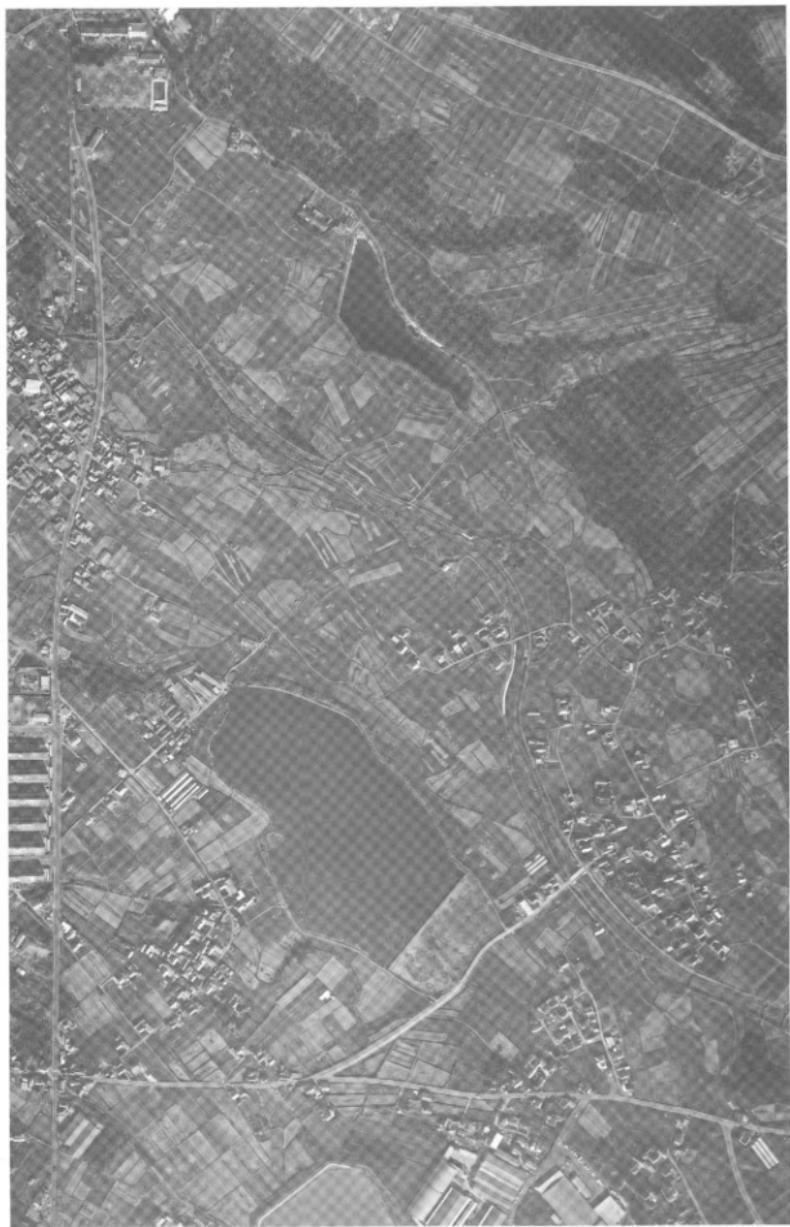
16.8m

- 1 IOYE3/3 黑褐色シルト質粘土 (土壤層)
- 2 IOYE5/3 に亘る黄褐色小層～粗砂質シルト
- 6 NA/ 黄褐色細砂 (木片多い)
- 5 NA/ 黄褐色細砂 (木片多い)
- 4 NA/ 黄褐色細砂 (木片多い)
- 3 7SYR2/1 黑褐色シルト (有機質若干含む。古墳時代の遺物含む)
- 2 2SYR2/1 黄褐色シルト (古墳時代の遺物含む)



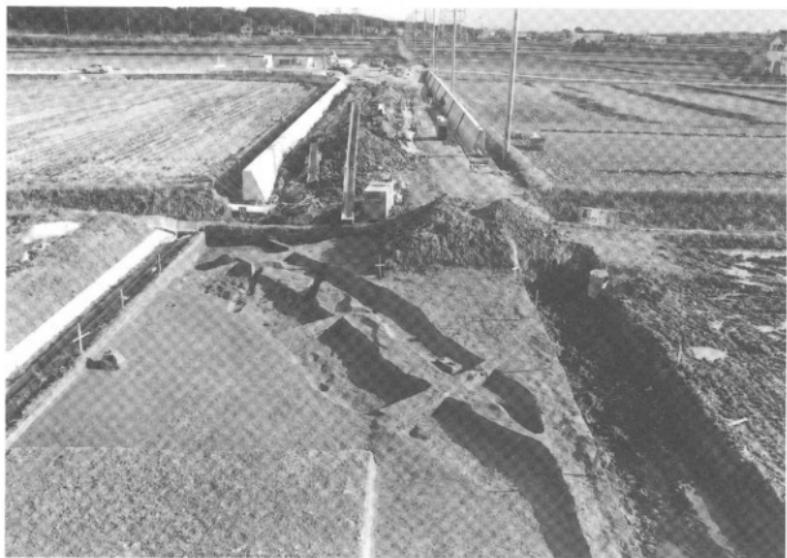
山中遺跡調査区・溝土層断面図

写真図版



天神前遺跡・山中遺跡空中写真（国土地理院、昭和50年撮影）

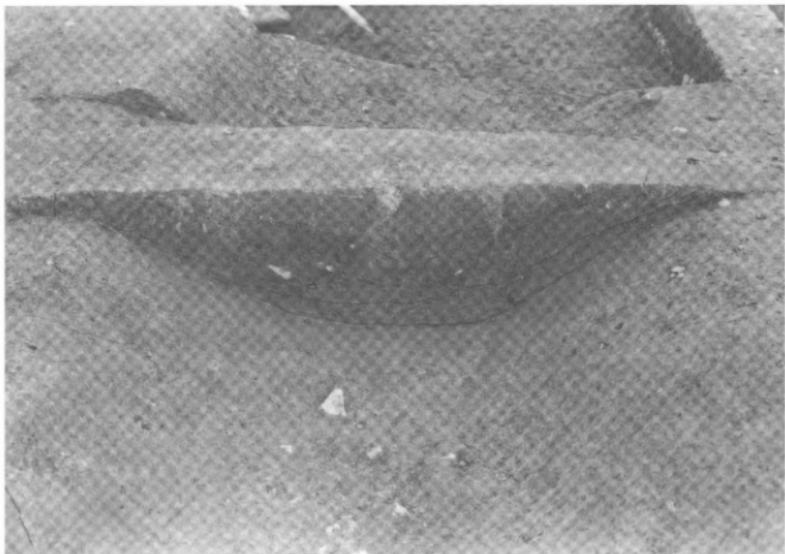
写真図版2 天神前遺跡



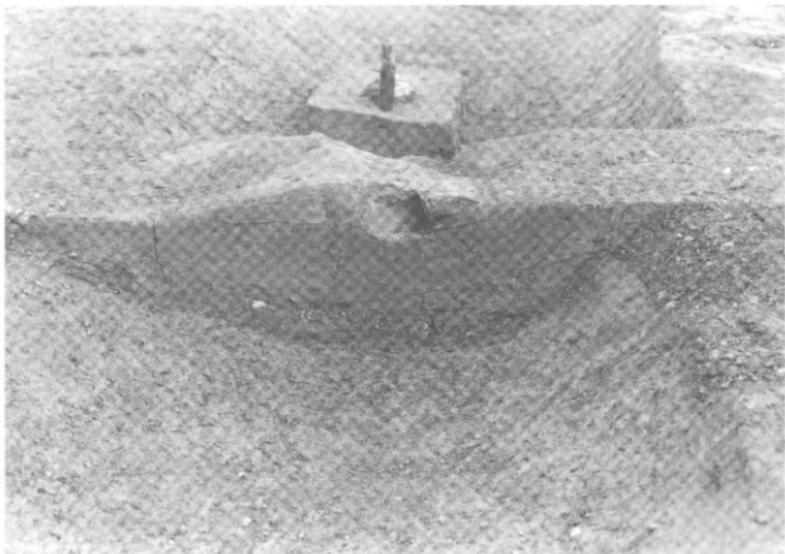
全景（北西から）



全景（西から）

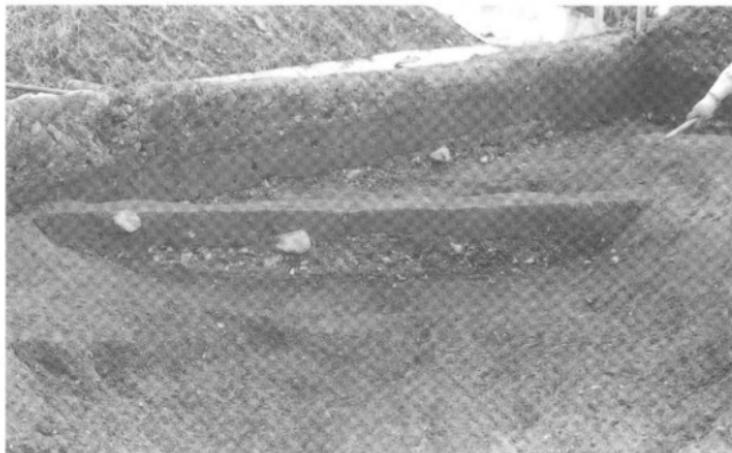


SDO1珪B断面 (西から)

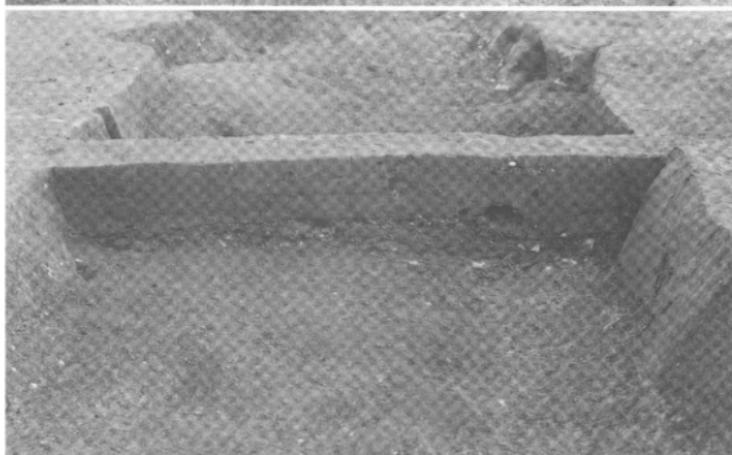


SDO1珪B断面 (西から)

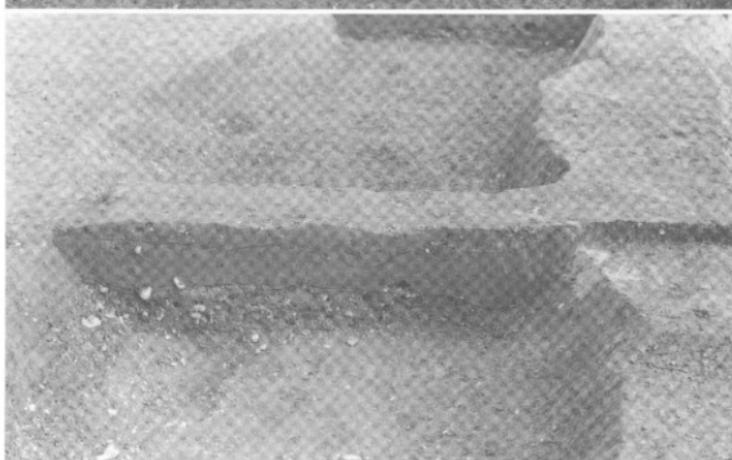
写真図版4 天神前遺跡



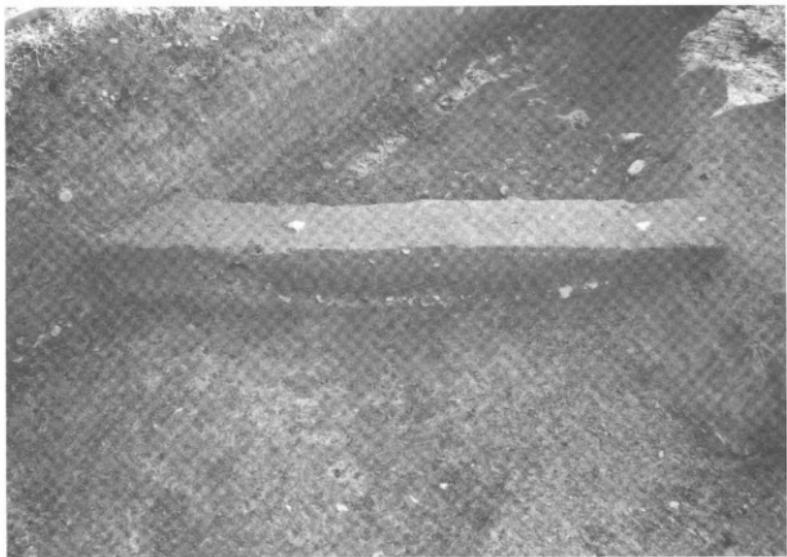
SDO2畦A断面（西から）



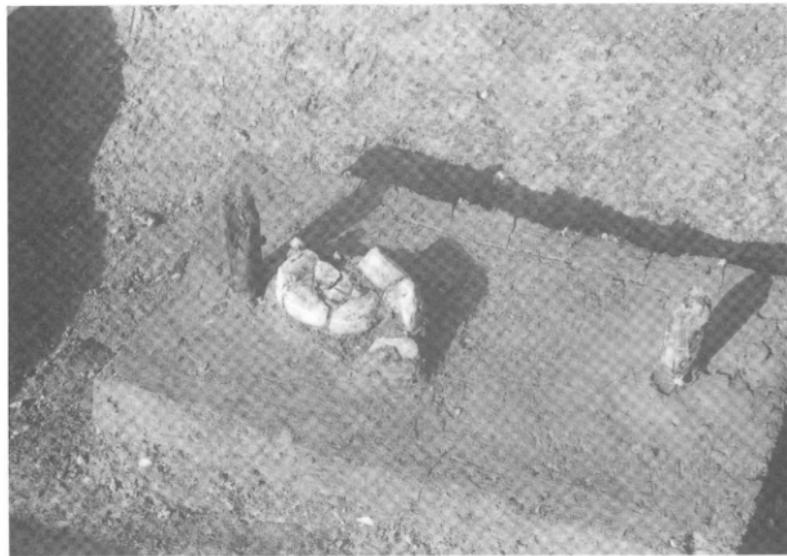
SDO2畦B断面（西から）



SDO2畦C断面（西から）



SD01畦A断面（北から）



遺物出土状況（南から）

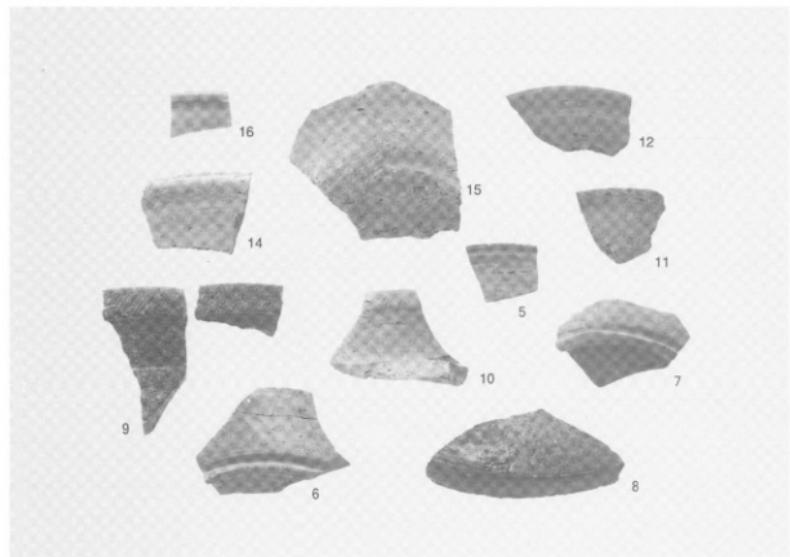
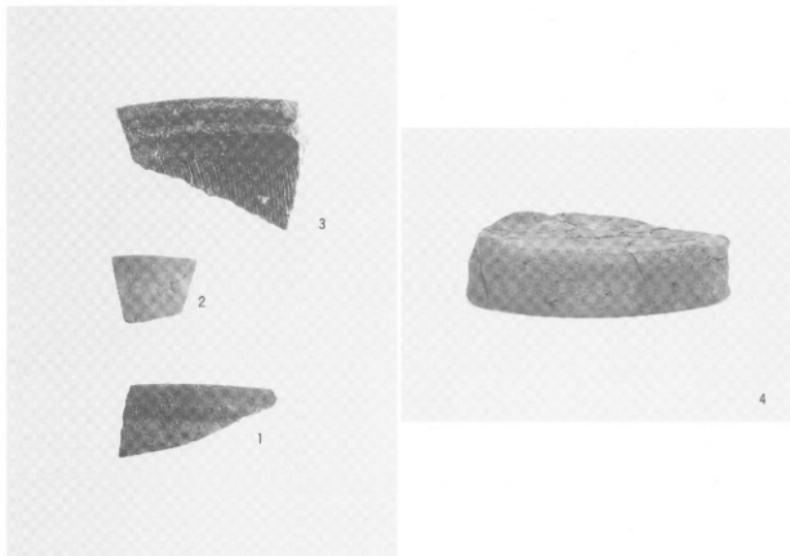
写真図版 6 天神前遺跡



SD01・02完掘状況（西から）



SD03完掘状況（北から）



出土遺物（1）

写真図版8 天神前遺跡



13



17

出土遺物（2）



A地区全景（南から）

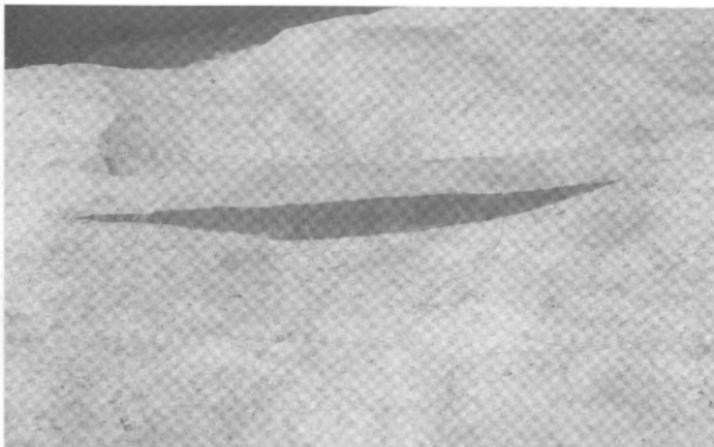


A地区全景（北から）

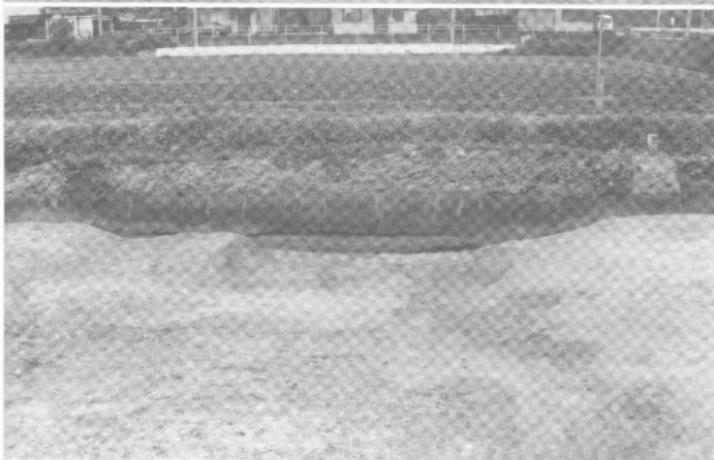


C地区全景（南から）

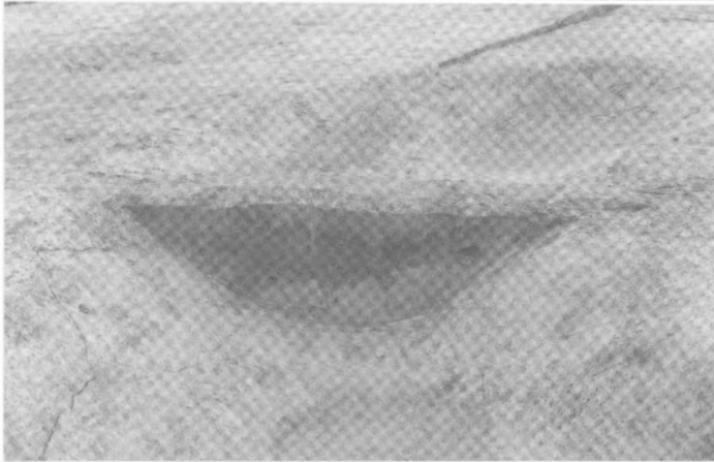
写真図版10 山中遺跡



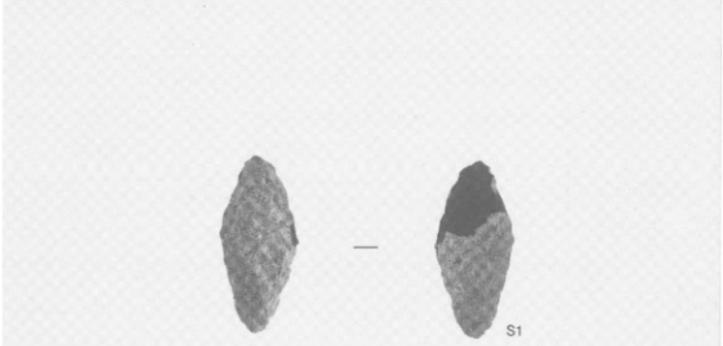
A地区SD01（北から）



A地区SD02（南から）



A地区SD03（西から）



報告書抄録

ふりがな	てんじんまえいせき・やまなかいせき							
書名	天神前遺跡・山中遺跡							
副書名	一般県道平莊・大久保線道路改良事業に伴う発掘調査報告							
卷次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第244冊							
編著者名	岡本一秀、中村弘							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL078-531-7011							
発行年月日	2003(平成15)年1月10日							
ふりがな 所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
てんじんまえいせき 天神前遺跡	ひょうご けん 兵 庫 県 かごしま 市 かんのちょうかいもの 神野町石守 あざてんじんまえ 字 天 神 前	28210	930169	34度 46分 16秒	134度 52分 50秒	1993.12.07 ～ 1993.12.18	194m ²	一般県道 平莊・大 久保線道 路改良事 業に伴う
やまなかいせき 山中遺跡	ひょうご けん 兵 庫 県 かごしま 市 かんのちょうかいもの 神野町石守 あざやまなか 字 山 中	28210	940068	34度 46分 04秒	134度 53分 04秒	1994.04.20 ～ 1994.04.26	363m ²	一般県道 平莊・大 久保線道 路改良事 業に伴う
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
天神前遺跡	集落跡	奈良時代～中世	溝	須恵器・土師器 陶磁器				
山中遺跡	集落跡	古墳時代	溝	須恵器・石器				

兵庫県文化財調査報告 第244冊

天神前遺跡・山中遺跡

—一般県道平莊・大久保線道路改良事業に伴う発掘調査報告書—

平成15(2003)年1月10日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650-0011 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 株式会社 旭成社

〒651-0091 神戸市中央区若菜通5丁目1-16-280
